

人の流れを生み出すまちの血液

バスや鉄道など、地域公共交通の役割は大きく分けて二つあります。一つは地域内の生活交通としての役割。皆さんが学校や職場、買い物に行くなど、日々の活動目的を果たすための足です。もう一つは、観光など地域内外の人の動きを生み出すこと。那須塩原市は観光地ですから、観光客の移動を支える公共交通は必要不可欠です。特に、利用が活発であればあるほど大きな人の流れを生み出し、経路上にはまちのにぎわいが生まれます。まちの活性化と交通は、密接な関係にあるのです。長い期間で考えれば、交通網をどう守っていくかがまちの存続に大きく関わるのだと考えています。

変革を迫られる公共交通



福島大学 経済経営学類

吉田 樹 准教授

市地域公共交通アドバイザー。国土交通省・地域公共交通の活性化及び再生の将来像を考える懇談会委員など、国の交通政策にも携わる。地域交通政策やまちづくりが専門。

一昔前は、地方でも満員のバス

や電車で揺られて通勤する光景がよく見られました。ところが、車の普及などによって利用者が減り、サービスの低下を余儀なくされ、それによってさらに利用者が減る。負の連鎖に陥っています。「公共交通は必要な人だけ使えばいい。自分には車があるので無関係」。そう考えている人もいるでしょう。確かに車はいつでも行きたい場所に行ける便利なもの。しかし、学生や高齢者など、公共交通を必要とする人は確実に存在します。「自分には無関係」という意識のままでは「いざ公共交通に頼ろう」と思っても、今を支えなければ遺すことはできません。「行きたい高校があるけど通学距離が遠い」「高度な医療を受けのために遠くの病院に行かなければいけない」。車に頼らず移動ができるということは、こうした悩みを解決し、「まちに住み続けたい」という動機付けになります。つまり、公共交通が使われないまちは、魅力を失うといっても過言ではありません。那須塩原市は3つの鉄道駅という強みを有していることもあるため、これらの拠点を軸にどのような交通網を創っていくか、官民のあらゆる交通インフラをテーブルに載せて、議論する必要があるでしょう。

必要なものだからこそオール那須塩原で考えたい

交通で生活を支えるまちへ

人々の生活を陰で支える公共交通。それらを取り巻く環境も年々変化している。現在市では、さらに利便性の高い交通網を形成するための「地域公共交通網形成計画」の策定準備を進めている。那須塩原市地域公共交通アドバイザーを務める福島大学・吉田准教授に公共交通の役割や必要性、今後のあり方について話を伺った。



平成20年から戦略的な利用促進を進める八戸の路線バス。右肩下がりの業界ながら「運行距離減」、「輸送人員増」、「赤字採算から黒字採算へ好転」を達成

利用者目線で好転した事例に学ぶ

自治体規模こそ違いますが、私が交通政策のマネジメントに携わらせていただいた青森県八戸市を紹介いたします。それまで不採算だった駅周辺の路線バスを、徹底的に利用者目線で改善しました。

具体的には、八戸駅・中心街間の10分間隔運行の実施、上限運賃制の導入、路線バス総合案内所の設置、色分けしたわかりやすいバスマップの発行など。これらの実現には公営・民営事業者の連携が必要不可欠でした。こうした取り組みで集客を高めることができ、公的資金の投入額が減り、他分野に投資できます。

これからは時代の流れに合わせて公共交通自身も変わる必要があります。親しまれる公共交通を創り・守り・育てていくために、運行事業者・行政・そして利用者である住民の皆さん自身が三位一体となり、将来像を描いていくべきではないでしょうか。

出掛けの帰り、バスに乗った。

4割ほど埋まった座席。後ろから2番目、右側の席に腰掛ける。

走り出すとバス特有のゆるい揺れ。ガタガタッ：揺れで座席がきしむ。

ふとぼんやりと窓の外を眺める。流れていく景色。漂う雲、空を染める夕日。

いつもと違う目線で見える景色は、見慣れたようでそうじゃない。

時間がゆっくりと流れる。

沈む夕日を最初から最後まで見届けたのは初めてかもしれない。

時間がゆっくりと流れる。

たまにバスも いいもんだ。

特集「バスといつまでも」終わり